

## 2026.03.15 卒業式式辞

今年は例年になく、寒い冬晴れの日が続きました。今週も寒の戻りがありましたが、今日は早春の暖かな日差しが降り注いでいます。

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。ご家族、保護者の皆様、まことにおめでとうございます。本日こうして保護者の皆様、来賓の方々、そして在校生のみなさんとともに、卒業生の門出をお祝いできることをほんとうに嬉しく思います。

みなさんの中学入学は2020年、世界的に大流行した新型コロナウイルスの対応に日本中が必死に取り組んでいる時期でした。対面で行われる予定だった入学式はオンラインになり、6月に再開した学校も当初はクラスが半分に分かれて登校する等、異例づくめのスタートでした。

私は、みなさんが先日登校日に書いてくれた6年間の振り返りを全員分読ませてもらいましたが、多くの人が、このときの体験に触れていました。一人の方の感想を紹介します。

——私たちの学年は新型コロナウイルスが流行中の2020年に神奈川学園へ入学しました。入学式は行われず、動画という形で朝、母と一緒に見ていたことを今でも覚えています。その後の授業も対面ではなく、リモート上での授業であったため、クラスメイトとはほとんど顔を会わせないままでした。文化祭も音楽会も中止になり、ほとんど学校全体での行事はなくなる中で、学年では運動会をしたりして、少しずつみんなとの距離を縮めることができたのかなと思います。コロナの影響で今まで自分たちが普通と思っていたことが、普通ではなくなるということを身にしみて実感しました。

今紹介した彼女と同じように、新型コロナウイルスの経験から、いかに「普通の生活」が大切で貴重なのに気づいたという感想を多くの人が記していました。一方でさまざまな制約がある中、みなさんは1日1日、一つ一つの場面を大切にしていきました。別の方の感想です。

——中2になり、初めての文化祭がとても印象に残りました。初めてクラスの子たちと協力して一つのことに取り組み、とても大変だったけれど、楽しかったです。友だちと同じ時間を共有することが、こんなにも楽しいことなのだと知りました。また、部活動も本格的に始まり、うまくやっていけるか不安だったけれど、先輩方に優しく教えてもらいながら、練習に励むことができました。

コロナ禍に大きく影響された中学時代でしたが、みなさんは毎日の学校生活を全力で創りあげていきました。感想では、中学3年生で「祭」をテーマに学年全体で取り組んだ文化祭や、中1・中2で経験できず中3で初めて取り組んだ音楽会などに多くの人が触れていました。

みなさんが高校に進学する頃には新型コロナウイルスの影もかなり薄くなり、充実した3年間が待ちました。その中で、みなさんはさまざまな「発見」をしていきます。FWに関わる感想です。

——私はこれまで震災について学校の授業やニュースで学んできました。しかし、震災当時の私は幼く、まったく記憶になかったため、どこか遠い出来事のように感じていて、正直に言うと災害に対する強い危機感を持っていませんでした。そんな私の考えが変わったのは、FWで岩手・宮城に行き、実際に被災地を訪れたことがきっかけでした。震災から年月が経っているのにも関わらず、今もなお残る痕跡や語り継が

れている経験を目の当たりにしました。現地の方のお話を聞いたとき、その一つ一つの言葉に重みがありました。教科書の文章とは違い、その人自身の体験として語られる出来事は強く心に残りました。そのとき私は初めて「知っている」と「わかる」は違うのだと実感しました。

彼女はFWの経験を通して、「知る」と「わかる」ことの違いを感じています。こうした「実体験の大切さ」についてはFWや海外研修等、多くの方が記していました。そんなかけがえのない体験を重ねる中で、着実に成長の階段を駆け上がった3年間でした。

さて、ここからは少し未来に目を向けてみます。

これからみなさんは新しい時代の新しい社会を創っていきます。そんな新しい時代を創っていくみなさんに期待したいことを二つ、お伝えしたいと思います。

一つは、「世界」に目を向けることです。これも感想をご紹介します。

——私が最も自分の考えが変わったタイミングだなと思うのは、中3の『サード・キッチン』を1年かけて読み解く学習をした時だと思います。今でこそ多様性という言葉は広く世間に伝わって認知されていますが、その頃少なくとも私は浅い理解で、「自分とは関係のない世界」という認識をしていた言葉でした。しかし『サード・キッチン』を読んでから、LGBTQや人種差別問題に関しては、人と人とで構成されたこの社会に生きている以上、関係のない人なんて一人もいないんだということに気づかされ、その気づきが私をあらゆる社会問題への関心に結びつけました。具体的な差別問題以前に、そもそも私たちはまったく思想の異なる人々と一緒に生きていく必要があり、たとえどんなにわかりあえない人とも何とかして共生の道を探さなくてはならない。「分かり合えないから排除しよう」「あつちは“間違っ”ているから“正しく”矯正しなければいけない」と対話が放棄されたときに平和は崩壊します。

彼女は、この後、「そうならないように、私たちは自分と他人とでは立場や考えが異なるという現実を受け止め、受け入れていく必要がある」と続けています。

彼女は自分とは無関係だと思っていた「多様性」の課題が、実はまったく無関係ではないと気づきました。たしかに、世界の問題はどこかで私たちとつながっています。別の方は中1のときに講演してくださった俳優・サヘル・ローズさんについて触れていました。サヘルさんの講演を聞き、自分は日本のことしか気にかけていなかったけれど、世界に目を向けることが大切だと気づいたと記していました。サヘルさんの出身国はイランです。イランはもともと国内外でたいへんな状況でしたが、今はいっそう緊迫した情勢にあります。そしてその情勢は日本の私たちにも大きく関わっています。

繰り返しますが、世界はつながっています。だからこそ、常に世界に目を向けてほしいと思うのです。

みなさんに伝えたいことの二つめです

みなさんは「自立した人」でいてください。

「世界に向ける目」とまったく逆のベクトルになりますが、「自立」のためには自分自身に向ける目が大切です。自分の考えや理想にしっかりと向き合いながら、その実現に向けて歩むことができる——それが「自立」だと思います。

その「自分への向き合い方」のヒントとして、あるエッセイストの言葉を紹介したいと思います。彼は人生において「成功」よりも「成長」を求めることが大切、と言います。「成功」は、他者からの評価であり、「成長」

は自分がどう感じるかである、とも記しています。

実は、卒業生のみなさんの中でもまったく同じ感想を書いた方がいます。彼女は、自分自身が不器用で部活動の中で周りの人と比べても技術の習得が遅かったと述べた上で次のように言います。

——私の部は運動部のように戦うことも勝ち負けありません。だからこそ他人と比較することも大事だけれど、それ以上に前回の自分よりも少し、ほんの少しでも成長できるようにしようと思いました。

彼女は部活動の中で前回の自分を超越えることを目標にしていたのですね。

「〇〇賞を受賞した」「〇〇の分野で1位になった」——こうしたことを社会では「成功」と呼びます。もちろん、何かで1位になるのは素晴らしいことですが、同時にそれは他者との比較であり、他者からの評価です。それらは自分の力だけではどうすることもできない部分があります。そう考えると、「成功」はそれ単独で目指されるものというよりは、自分を磨き、自分を成長させることとともに、あるいはその結果として達成されるものだと言えるのではないのでしょうか。

これに対し「成長」は、昨日より今日は前進できた、昨日と自分は少し変わった——そんなふうに自分自身が感じられるかどうかです。比べるのは他者ではなく、以前の自分です。まさに、先に紹介した卒業生の方の「前回の自分よりも少し、ほんの少しでも成長できるように」という言葉が重なります。

自分は今、自分の理想に向かっているか。昨日より少しでも近づく努力ができたのか。もちろん「理想」は変わってもかまわないのですが、そんなふうに、自分自身に向き合いながら、自らの歩みを確かめ、地に足のついた歩みを続けられる——それが成長であり、「自立した人」の歩みでもあると思います。みなさんにはそのような歩みができる人であってほしいと願っています。

みなさんの前に世界は大きく広がっています。その広い世界と、自分自身にしっかりと向き合いながら、理想に向けての一步を刻んでください。

そして。

神奈川学園は、みなさんが帰りたと思ったときにいつでも帰ることのできる、「心のふるさと」であり続けます。みなさんが帰ってきてくれることをいつでもお待ちしております。

本日はご卒業、おめでとうございます。

以上をもちまして式辞といたします。